Poster Session

Fri. Nov 20, 2026 2:00 PM - 3:00 PM JST | Fri. Nov 20, 2026 5:00 AM - 6:00 AM UTC | ポスター4

Poster Session 8 Chemotherapy for Advanced Colorectal Cancer 1

座長：古畑 智久（札幌禎心会病院）

[P8-5] Characteristics and Outcomes of Patients with Colorectal Cancer Undergoing Resection During Second-line Chemotherapy for Stage IV or Recurrent Metastatic Disease

*Miki Shindo[1] (1. Department of Gastroenterological Surgery, Osaka University Hospital)

【背景】
大腸癌Stage IVまたは転移再発症例に対して、R0切除を達成できた場合に予後改善が期待できる。化学療法が実施される場合、多くは1st line治療後にR0切除が行われ、2nd line化学療法中に切除に至る症例の臨床的意義については明らかでない。
【目的】
2nd line化学療法中に外科的切除に至った大腸癌症例の臨床的特徴および転帰を明らかにする。
【対象と方法】
当院において大腸癌Stage IVまたは転移再発に対し2nd line化学療法中に、R0切除を企図して外科的切除を施行した症例を対象とした。患者背景、臨床病理学的因子、治療内容、ならびに予後について後方視的に検討した。
【結果】
2016年1月から2026年1月までに、当院で大腸癌の肝転移、あるいは肺転移に対して手術を行った症例は101例であった。そのうち、2nd line化学療法中に外科的切除を施行した症例は7例で、そのうち6例でR0切除が得られた。2nd lineで手術を行った時点での年齢中央値は61歳、男性3例、女性4例であった。原発部位は右側が1例、左側が6例で、転移部位は肝臓5例、肺1例、肝臓・肺の両方転移が1例であった。肝転移症例5例のうち、1例は直腸癌の症例で、骨盤左側方リンパ節転移も同時に認めており、肝転移切除したのちに左側方リンパ節郭清を行いR0切除が得られた。R0切除を達成できなかった1例もまた、直腸癌の症例で肝臓・肺の両方転移を認めており、肝転移切除したのちに原発巣切除を行った。肺切除を目指していたが、術後化学療法施行中にも腹膜播種、新たな肝転移出現にてR0切除には至らなかった。
2nd line化学療法のbest responseはPR2例、SD5例であった。R0切除後の観察期間中央値は419.5日、RFS中央値は244日、OS中央値は1186日であった。再再発は4例に認め、再発部位は肝臓3例、肺1例で肝転移症例3例のうち、1例は肝門部リンパ節再発も認めていた。再再発に対して切除や化学療法を行い、3例は現在無再発生存中である。
【結語】
2nd line化学療法中にR0切除に至る大腸癌症例は一定数存在し、その一部では良好な予後が得られる可能性が示唆された。適切な症例選択により、2nd line治療中においても外科的切除が有効な治療選択肢となり得る。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会